

菊田太郎著

東海道守口宿・守口駅

「産業分布論」を専攻する経済地理学者である著者は、そのかたわら家蔵の守口宿に関する根本史料を駆使されて、同宿の研究にあたられていたが、このたび一書にまとめられた。

本書は「徳川時代における守口宿」と「明治維新後の守口宿・守口駅」の前後二篇にわかかれ、その中に宿の成立・構成・役職員・助郷・本陣と旅籠屋・継立と通行・財政・維新後の宿駅制の変化などについて、原史料を豊富に引用しつつ論証されている。大阪に最も近い宿であるため、人足継ぎのみを行なう休息所としての性格が濃い小駅であり、助郷村の疲弊も比較的少なかったなどの同宿の特色が、なかば以上の頁数をしめる史料に裏づけられて、克明にえがきだされている。ことに、「町村と宿駅との関連」や「維新直後の宿駅制度」などは、従来とりあげられることの少なかった問題であり、教えられる点が多い。

徳川時代の宿駅の内容は、各宿ごとに異なり、原則では律しえないため、本書のように一つの宿に関するすべての問題をとりあげ、史料集としての価値も大きい本書の出版は極めて有意義であるといえよう。叙述の行間にある多くの史料には、読みやすくするため「」内に、字を補つたりしているなど、行届いた配慮がみられる。(A五判二三〇頁
グラビア四頁 昭和三四年八月 京都柳原書店刊 定価三八〇円) (山澄 元)

三木与吉郎編

阿波藍譜 栽培製造篇

さきに「三木文庫所蔵庶民史料目録」を刊行され、学界に貢献されるころのあつた三木産業株式会社が、その修史事業の一環として、斯業に関係の深い藍関係文献を集成して、一書を公刊された。三木家第十三世当主の編になる『阿波藍譜』一冊がそれである。日本資本主義発達史の上で、藍は商業的農業の重要な一品目として、夙に注目されたところであり、明治以降、外国産藍、或いは人造藍の

輸入におされて、漸次衰退の一途を辿つているとはいえ、その位置はなお研究上の好個の課題といえるものであつた。就中、阿波藍の名が、国内市場にもつとも卓絶した地位を占めていたことは周知の事実に属する。今回刊行に及ばれた「阿波藍譜」は、十一世三木与吉郎順治の稿「藍の栽培及び製法」に始まり、阿波藍の栽培・製造に関する文献を蒐録して、研究の発展に寄与するところ大なるものがあると考える。今試みにその目次を記すと、

第老編 明治以前の伝授書

藍作り方伝授書

染製法伝授書

藍の殺させ方(染の製法)

第貳編 明治期の通誌

阿州産藍の説

阿波国藍業略誌

第參編 明治以後の研究

阿波国藍作法

蓼藍及其製品ニ関スル研究成績

阿波の藍作

阿波藍の殺床

森下頼之助

森下頼之助

森下頼之助

安岡 百樹

椎野 宰資

吉川 祐輝

町田 咲吉

徳島農事研究会

三木 文庫